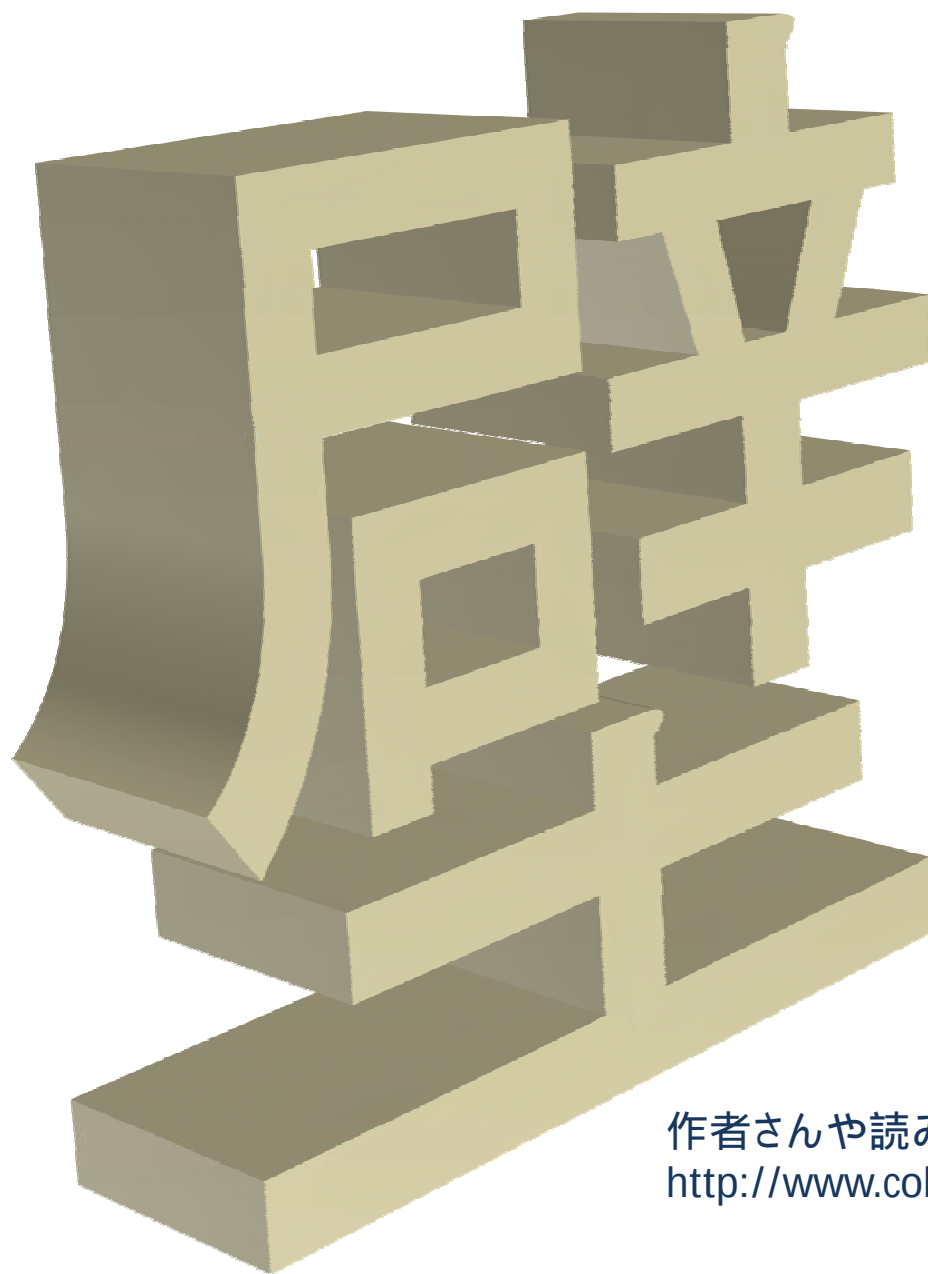




作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

議長「周君の調査の結果、「なぶる」が『𪔐』だったのは65組、『𪔐』24組、『男男』は5組だったそうアル。よって『𪔐』に決定するアル。周、ご苦労アル。今回使った参考資料の領収書は今月末までに出すアル。さて、次で今日は最後の仕事アル。次は「かべ」という漢字を決めようと思うアル。」

李「『𪔐』がいいと思うアル。」

議長「会議を早く終わらせたいのはわかるけどもう少し頑張つて欲しいアル…」

周「『𪔐』がいいと思うアル。」

議長「屋根をつけるとかそういう問題じゃなくて…」

李「『𪔐』がいいと思うアル。」

議長「それだと、「くち」を意味する『𪔐』という字と紛らわしいアル。じゃなくてもっと凝った案が欲しいアル：最近では『山』とか『川』とかなんの捻りもない漢字ばかり発表していて国民から税金泥棒言われてるアルよ。この前『串』を発表した時なんて石を投げられたアル。だから今回は真面目に」

周「ブームの2階建て住宅も考慮し『日』がいいと」

議長「死にたいか？」

李「「かべ」というのは薄いついたて式の建物の外部を囲むもの、内部を仕切るもの。という定義がある。さらには心と心の距離があること。なども意味として含んでいる。これを表すのは難しいな…」

周「前者の定義をとると『囚』というのが思いついたが捻りがないな。建物の周りにある木と、建物までの道を組み込んで『𪔐』なんてのも思いついたが、これだと「いえ」と解釈される可能性が高い。」

李「後者の定義をとると、心が分かれているという意味で、『忿』などもありかな。ただやはり本来の意味としては前者なのだからそっちを前面に押していきたいよな。」

管理人「そろそろこの会議室の鍵閉めたいんですけど…」

議長「やっと二人が真面目になったアルのにもう時間切れアルか！」

周「議長、我々はベストを尽くしました。後は天の助けを借りましょう。」

議長「お前がベストを尽くしたのは『𪔐』の時だろ。」

李「議長、時は一刻を争うのです。残りは一瞬しかありません。これをどうぞ。いつものダーツです。」

議長「うむ…もう、やるしかないアルね…」

シュツ

周「あ、それは「なぶる」の没案、土の上で杖で叩かれ辛そうにしている人！前回の没案が紛れこんでいたとは！」

李「どうしますか？今回の没案だけでもう一度投げますか？」

議長「これが天からの指示アル。背いてはいけないアル…」

議長「…そして最後は「かべ」です。その意味する通りすんなりとは決まりませんでした。我々は大きな「かべ」にぶち当たりました。しかしプロの意地として、素晴らしいものを考えつきたかった。ただそれだけの思いで白熱した討論を重ねて、その結果『壁』に決定しました。これは『辟』という薄く平らなものを意味する字、それとかべの原材料である『土』という字を合わせて…」

空想科学への旅

ガンダムやマジンガーZは、現代から見ても画期的なロボットであった。驚異的な性能はもちろん、彼らはそのかつこよさで当時子供だった我々似に大きな夢を与えてくれた。

筆者のような理工系学部志望者の多くがそうであろうように、現代の多くの人々はアニメや漫画の影響を受け、その実現の夢を追ってガンダムやマジンガーの実現を長い間夢見てきた。彼らにあくまで科学的な考察を施し、ある時は多額の投資をしてその実現を目論んだ。その結晶がアシモであり車であり、日本の誇れる技術の一部である。

この夢が「空想科学」という一学問の誕生させることとなった。1996年宝島社の「空想科学読本」がヒットしたことにより、この用語は以後大々的に使用されるようになる。

このように人々は作家や漫画化たちが創造した空想科学的ロボットや兵器たちを作ることにいそしんだが、酷いことにその多くは実用化どころか設計段階でその実現性を否定されている。

その非実現的条件を空想科学では「科学の壁」と呼ぶ。先述した彼らの存在は、現代の科学でさえその存在を否定されてしまう。永久機関や超光速移動が存在しないように、モビルスーツや超合金Zは存在しないとされたのである。

それでも人々はその実現を諦めなかった。

先ほど紹介した「空想科学読本」シリーズは多くの場合その存在を仮定した上で論理を進めているため、その実現性追求には全く触れていない書籍である。しかし、科学の壁を立てつこうとする人々は確かに存在したのだ。

防衛省技術研究本部が東京新宿のホテルグランド市ヶ谷で開催した「平成十九年度研究発表会」防衛技術シンポジウム二〇〇七」の発表で、なんと防衛省が

現在開発している展示品目の中に『ガンダムの実現に向けて(先進個人装備システム)』という表記が存在したのである。これは「先進個人装備システム」のイメージとして「ガンダム」という語を使用しただけではあったが、多くの場で反響を呼んだ。同発表会ではガンダムの劇中に登場する兵器「フィンファンネル」と同コンセプトの弾道ミサイル迎撃装置の開発も発表されている。

また同じガンダムの例として千葉工業大学未来ロボット技術研究センター所長の古田貴之氏が科学技術振興機構のホームページ「サイエンスポータル」に今年の1月掲載した記事も挙げることができだろう。彼らは実際にガンダムを設計してしまったのだ。ハニカム構造のアルミ合金板が約4万4千枚必要で、メインコンピュータはIBMのブルージーン、動力は軍用ヘリ「アパッチ」のエンジン7機分、加工・制作費が264億円と見積もり、それらすべてを合計すると製作費はおおよそ800億円弱になるとしている。ただし、これは空を飛ぶことも銃を撃つこともできない。原作とはほど遠い、ただ歩くためのだけのロボットである。

彼らはガンダムの実現には失敗している。防衛省はそのコンセプトを採用するに留まり、古田氏は歩くこととしかできないと結論づけた。しかし、彼らの行いは科学の発展には無駄だったのであろうか？その記事に古田氏はこう書いている、「ガンダムをそっくり作ることはできませんでしたが、ガンダムを作る技術は大事なんです。人が乗って動くロボットはこれから必須だと思います」

古田氏は科学の壁を超えることはできなかった。しかし、そのコンセプトを引き継ぐことで新たな科学の可能性を探ろうとしていたのである。

空想科学は無意味だと思われることも多い、しかし、このようにして空想科学は我々の科学的意欲の大きな原動力になっているのかもしれない。

Lovers over the wall

ト

壁が音を立てる。またか、と少し心配になる俺、別に心霊現象とか、家が軋んでる訳じゃない。隣の部屋の妹が、ぐしやくしやにした紙をゴミ箱に投げ捨てた音だ。

「ねえ康輔お兄ちゃん、今ちょっと時間ある？」

妹の葵が俺の部屋に来る。手には書きかけの原稿用紙。

「この続きなんだけど……」

葵は小説家を目指している。行き詰ると時々、俺の部屋に来て話をしにくる。意見が聞きたいと言ってくるが、文才のない俺には役立つ助言なんて出来るはずもなく。向こうもちょっととした息抜き程度にしと考えてないだろう。

両親が共働きで一緒にいる時間の多かった俺たちは、当然というように仲が良かった。その愛情は「兄妹」という枠組みをすでに超えていた。互いに互いの気持ちを知りながら、その束縛に抗うことも出来ない。許される事のない恋。二人が結ばれることが許されるのは、小説の中だけだった。

壁がまたトンと鳴る。さっき見せてもらった話を思い出す。

良家のお嬢様と彼女を守る護衛の恋物語。あまりにも自分達と似ている登場人物達。この物語の中で、彼らは一体どんな結末を迎えるんだろうか……。

そんなある日、葵が交通事故に遭った。

病室のベッドの上には、妹の葵が力なく座っていた。見たところ大きな傷はそれほどないようで、安心して声をかける。ゆつくりと振り向いた葵は、驚いたような顔でしばらく沈黙した後、こう言った。

「え、ええと……どなたですか？」

記憶喪失の一種だそう。しばらく自宅の様子を見るしかないと言われた。

「葵、昼飯、何か食べたいものあるか？」

「……なんでも、いいです」

ぎこちない敬語に寂しさを感じつつ、わかった、とだけ言って炒飯を作り始める。俺の作る炒飯は葵のお気に入りだった。ネギを切りながら、葵のほうを見る。偶然目が合うと、とたんに目をそらされてしまった。少しだけ心が痛む。結局、炒飯を食べ終わるまで、一言二言程度の会話しかできなかった。

「葵の部屋」と札の付いたドアを開け、入る。なんとなく落ち着くその雰囲気、やっぱりここは私の部屋なんだと確信が持てる。机の上には、たくさんの原稿用紙と書き途中の文章。読んでみても辛く思えない。私はこの先、どんな話を書くつもりだったのかな……。

見覚えのない書きかけの小説、同じ家に住む見知らぬ「兄」。友達の顔を見ても、名前も何も思い出せない。私が最初どれほど不安だったことか。それでも、康輔は私の記憶が戻るよう、出来る事は何でもしてくれて。小さい頃の話をしたり、好きだった漫画やテレビを見せてくれたり。記憶はほとんど戻らなかつたけど、私は少しずつ康輔に心を開いていった。「康輔さん」と、さん付けだった呼び名も呼び捨てに変わった。康輔といふそれだけで安心して、康輔はいつも私に笑顔をくれた。いつの間にか私は、一枚の壁の向こう側にいるその人の

ことを、もつともつと知りたくなっていた。

「今なら、書けるかな……」

私は、なんとなく、ごく自然にペンを握っていた。それから、あの小説の続きを書き始めた。何度書いても納得がいかない。私は何度も紙をクシャツと丸めてゴミ箱のある壁に向かって投げ捨てた。

トン

壁が音を立てる。自室で大学から出された大量の課題をこなしていた俺は、少し驚いてそちらを見る。小説を書く事は体が覚えていたのだろうか。以前と変わらないその音に、かすかな安心感を覚えた。

葵は少しずつだが打ち解けてくれた。俺の事は康輔と呼ぶようにはなったが、まだ兄妹と呼べる関係までは修復出来ていなかった。もしも記憶がこのままでも、これから新しく思い出を作っていけば良い、そう思えるようになっていた。

「……康輔は、私の事どう思ってるの？」

それを、訊ねられるまでは。

自分の部屋でくつろいでいた時だった。

「康輔のことが、気になって頭から離れないの……。今何をしてるのかな、とか、私の事どう思ってるのかな、とか……。バカみたいだね。一枚の壁で遮られてるだけなのに、ものすごく遠く感じて、不安でいっぱいになって……。物音がするだけで、また起きてるんだって安心して……」

「葵……、それ以上言っちゃ、ダメだ。分かってるだろう……。兄妹が結ばれる事は……出来ないんだっ」

「ねえ……、本当のことが知りたい。康輔は私のこと、きらい？」

泣きそうな顔でそう迫ってくる。胸が締め付けられるようだった。抑えようのない感情が俺の中で暴れていた。

「嫌いなわけ……ないだろうっ！お前の記憶が無くなる前から、無くなつた今もっ……一人の女の子として、葵のことが好きだっ……！」

「じゃあどうしてっ、どうして私たちが結ばれちゃいけないの？兄妹の血の繋がりがあって、そんな今の私には分らないよー私が康輔を好きで、康輔が私を好きでいてくれて、それだけじゃだめなのっ？」

今まで葵の中にあつた物が、抑えのなくなった今、溢れ出していた。俺は、ただ葵を抱きしめる事しか出来なかつた。自分で自分が情けない。だけど、今の俺に出来るのは、これが精一杯だった。

葵は、泣いていた。そのまま鳴咽を漏らしながら、自分の部屋に戻っていった。その日、壁の音が聞こえる事はなかった。

いつの間にか涙は枯れていて、右手にはペンが握られていた。頭は妙にすっきりとしていて、話の続きを書き始めると、そのまま最後まで書き終えてしまった。私の記憶は、ほぼ完全に元に戻っていた。もう一度だけ、読み返す。これが、私の出した結論。

翌朝私は、完成した物語をお兄ちゃんの机に置いた。

「お兄ちゃん、やっぱり、兄妹は結ばれちゃいけないんだね……」

葵はそういつて原稿用紙の束を置いていった。

「葵、お兄ちゃんって……記憶、戻ったのかっ？」

小説は完成していた。そこには、永遠に結ばれることのない二人お互いを信じ愛し続ける二人の姿が描かれていた。

神器「ジエフサイド・ウォール」

お父さんとお母さん……一体どちがでてくるかなあ~~~~~☆☆

大きな壁

最近、最近。一人のよほよほの蠢碌したおじいさんが杖をついて散歩をしていると、とある建設現場を見つめました。おじいさんは建設途中の鉄壁に向かって言いました。
「たかーいたかーい壁になれ。おーきなおーきな壁になれ。」

数カ月後、おじいさんがまた空き地に行ってみると、高い大きな鉄壁ができていました。おじいさんは満足そうに笑うと、その壁にロープをくくりつけ、倒そうと引っぱりました。
「うんとこしょ。どっこいしょ。」
しかし壁は倒れません。

おじいさんはおばあさんと呼んできました。壁をおじいさんが引っぱって、おじいさんをおばあさんが引っぱって
「うんとこしょ。どっこいしょ」
それでも壁は倒れません。

おばあさんは通りがかりの小僧を呼んできました。壁をおじいさんが引っぱって、おじいさんをおばあさんが引っぱって、おばあさんを小僧が引っぱって
「うんとこしょ。どっこいしょ。」

「へおらー。お前かうんこ言うたのは。掛け声は『うん。ど。こ。し。よ。ど。こ。い。し。よ。』と決まっておるのだ。」
うひひ、と笑っていた小僧をおじいさんはすごい剣幕で怒鳴りつけ、持っていた杖で小僧を殴りつける。またロープをみんなで引っぱりました。
「うんとこしょ。どっこいしょ。」
それでも壁は倒れません。

脳天にたんこぶのできた小僧は通りがかりのコックさんを呼んできました。壁をおじいさんが引っぱって、おじいさんをおばあさんが引っぱって、おばあさんを小僧が引っぱって、小僧をコックさんが引っぱって
「うーんと胡椒。どっさり塩」

「へおらー。お前か胡椒だの塩だの言うたのは。掛け声は『うん。ど。こ。し。よ。ど。こ。い。し。よ。』と決まっておるのだ。」
ぐふぐ、と笑っているコックさんをおじいさんはすごい剣幕で怒鳴りつけ、持っていた杖でコックさんの背の高いコック帽を横殴りでぶっ飛ばすと、またロープをみんなで引っぱりました。
「うんとこしょ。どっこいしょ。」
それでも壁は倒れません。

ひしゃげたコック帽をかぶったコックさんは通りがかりの出前アルバイトの男を呼んできました。壁をおじいさんが引っぱって、おじいさんをおばあさんが引っぱって、おばあさんを小僧が引っぱって、小僧をコックさんが引っぱって、コックさんをアルバイトの男が引っぱって
「うでんいっちゃーうー！ とんぶりいっちゃーうー！」

「へおらー。お前かうでんだのどんぶりだの言うたのは。掛け声は『うでん。ど。い。し。よ。ど。い。し。よ。』と決まっておるのだ。」
あはは、と笑っているアルバイトの男をおじいさんはすごい剣幕で怒鳴りつけ、男の運び途中だった出前のうどんを全て食べ尽くすと、またロープをみんなで引っぱりました。
「うでんいっちゃーうー！ とんぶりいっちゃーうー！」

「へおらー。真面目にやらんか馬鹿者ども。掛け声は『うでん。ど。い。し。よ。ど。い。し。よ。』と決まっておるのだ。」

うぐあひひは、と笑っているみんなをおじいさんはすごい剣幕で怒鳴りつけ、杖を振り上げました。しかしそのとき、壁がみしみしと倒れ始め、轟音と共に砂埃を上げて倒れました。遂にあの鉄壁を倒したのです。おじいさんは怒りを忘れ、涙を流して喜びの踊りを踊りました。

その時、お巡りさんがやってきて怒鳴りました。

「くおらー。何をやってるかこの大馬鹿者ども。お前ら全員逮捕じゃああああ。」

カンペキな男

私は、目的の為なら手段を選ばない性質であった。そして、今まで自身の目的を達成しえなかった事は殆ど無かった。特に高校に入ってから、油断することなく全てのものをこなした。

しかし、今、その私が窮地に立たされている。いつも余裕で切り抜ける国語のテストで、悩んでいる。カンペキ主義の私にとって、テストでのミスは許されない。そう、気付いたかもしれないが、「カンペキ」が判らないのである。勘違いしないで欲しいのだが、全く判らない訳ではない。「完璧」と「完璧」の二択で悩んでいるのである。そもそも私のテスト対策はカンペキなのだから、全く判らない問題などありえるはずがない。

『カンペキ』が判らないんだから、対策カンペキじゃないじゃん(笑)

とお考えの方もいらっしゃる。言いつくするのは非常に心苦しいのだが、弁明させてもらおう。私は、目的の為に手段を選ばない性質だと言った。であるから、余裕を持ってテストを回答した後に当然見直しをする。しかし、自身の回答を自身で見直すのには限界がある。よって私は、見える範囲のクラスメイトの回答を見直しに使わせて貰っている。違反と思うかもしれないが、ばれなければいいのだ。カンペキなカンニングは、カンニングではないというのが持論だ。

さて、いつもならば他人の回答を見回して、やはり自分がトップである事を再確認するだけなのだが、今日は違った――

第七問 次のカタカナを漢字にせよ

① カンペキな男

――斜め前の翔太の回答は、「完璧」であった。

私は、その回答を見た瞬間に戦慄を覚えた。本来ならば、翔太は勉強に関して歯牙にもかける相手ではない。だが、今回ばかりは違った。翔太の苗字は――草壁であった。

つまり「壁」について翔太は、私の数段上を行っている筈であった。常日頃から「壁」を用いている彼には「壁」との違いは明確に感じられるに違いない。その翔太が「完璧」と書いているからには「完璧」は間違いないのかもしれない。しかし、もし「完璧」なら「壁」という字は何に使うんだろう。つていうかもはや、「草壁」なのか「草壁」なのかも怪しくなってきた。この位置からだと氏名までは見れない。そうして私は、第七問に苦悩していた。テスト終了時間は刻一刻と迫ってきている。

悩みに悩んでいた私は、ふとある事に気付く。ずっと前に読んだ小説にあった漢字だ。私は自身の記憶力に打ち震えながら、その字を回答用紙に書き記した。

① 癩癩な男

書き終えると共にチャイムが鳴る。回収されていく用紙を眺めながら、私は安堵の胸をなでおろした。一時はどうなる事かと思っただが、何とか終了した。あとは返ってくるのを待つのみだ。

一週間後、テストが返却された。

常用外漢字は認められないらしい。

私は、教員に怒りをぶつけた。

とある授業での出来事

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、授業を始めた。

「では、先週の続きで四二ページを開いてください。」

生徒が一斉に教科書とノートをひらき、いつものように音読をしてもらい私が黒板に要約を書いた。

すると、ある生徒が黒板の『完璧』の文字を見ながら手を挙げた。私が

「どうしたの？」

と尋ねるとその生徒は

「先生。《かんべき》のぺきって『壁』でしょ」

と言いつ出した。私がこたえようとしたところ、他の男子生徒がすぐに

「玉だつていやらしい」

と言った。私は「これはまずい」と思った。予想は的中し、クラス中が騒ぎ出した。「本当だ」という具合に、次から次へと生徒が話に乗ってかってくる。こうなると生徒を沈めるのは「苦労だ。教室のあちこちから騒ぎ声やクスクスと笑い声が聞こえてくる。私が「静かに！」といったものの調子で何度言っても聞くはずはなく、騒ぎ声や笑い声はますます大きくなるばかりだ。この状態が二十分以上も続いた。言い続けても一向に治まる気配のない生徒たちにしびれを切らし、いつもより少し強い口調で黒板を指しながら言った。

「静かにしなさい。《かんべき》はこの字であつてます。」

すると、クラス中が静まりかえり生徒の視線がいつせいに私のほうへ向いた。「少し言いすぎたかな」と思ったが、このあとの授業がいつもよりもスムーズに進めることができたため、たまには厳しく言うのもいいのかもしれないと思った。

次の日

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、昨日のように授業を始めた。しかし、そこにいるのは昨日とは違った眼で私を見る生徒たちがいた。授業中なにも発言しない生徒たちは、まるで置物のようだった。このような生徒たちに向って、授業をすることに違和感を覚えながらも一日の授業を終えた。教員室に戻り一息つくくと、突然電話が鳴り響いた。私への電話ということで受話器をとった。電話はクラスの生徒の保護者からだった。子供がおびえて学校に行くことを嫌がっているという内容だった。

その場は生徒に事情を話し、謝罪するという形で丸くおさまった。けれども、私はなんとなく腑に落ちなかった。言い方はきつすぎたかもしれないが、自分のあの時の行動は間違っていなかったと思う。はたして、保護者の電話に対し謝罪するという対応が一番よかったのだろうか。

これから乗り越えなければならない壁がまだまだあるように感じた

文化の壁

「やあ皆さんこんにちは。今日も僕マイケルとアンナが、とっておきの商品をご紹介しますよ。」

「皆さん最後までどうぞ、お付き合ってください。で、さっそくなんだけどマイケル、今日の商品は一体何かしら？」

「見て驚かないでくれよ？ ジャーン！ 今日の商品はこれ『越えられない壁』だ！」

「『越えられない壁』？ あまり聞いたことの無い名前だけど、どんな壁なのかしら？」

「おいおいアンナ、冗談はよしてくれよ！ これは最近巷で話題の大人気商品なんだ。間違っても知らないなんて言わせないよ？」

「こめんこめん、ちよつと冗談を言ってみたかっただけだわ。番組の流れ的にね。」

「なんだ、そういう事だったのか！ 流石はアンナ、僕のパートナーとして完璧だ。」

「マイケル、そこは壁じゃなくて壁よ。このままじゃ日本語の法則が乱れてしまうわ。」

「おottoとすまない。僕とした事が…。」

「そんな事より早く商品の説明をしましょう。視聴者の皆さんが待っているわ。」

「了解。では商品の説明だ。この『越えられない壁』、不等号の間に挟むだけで絶大な効果を発揮してくれるんだ。例えば普通の包丁と番組特製の万能包丁の間には

万能包丁＜普通の包丁

っていう関係が成り立っているんだけど。」

「むしろその万能包丁を先に紹介するべきだったと私は思うけど？」

「この不等号の間に『越えられない壁』を挟むと万能包丁＜（越えられない壁）＜普通の包丁という図式を簡単に作ることができるんだ！」

「まあ、何て事！ 突然不等号の数まで不自然に増えたわ！ どういう事なの、マイケル？」

「おいィ？ これ以上の確な指摘をすると視聴者の皆さんの怒りが有頂天になってしまうよ？」

「それはまた、しばらく収まることを知らなそうな怒りね…。分かったわ、続けて。」

「これは一種の強調表現なんだ。比較対象間の格差をより広げる為の新たな手法さ。以前紹介した『確定的に明らか』くらい斬新だろう？」

「そういう事だったのねマイケル、安心したわ。早く言ってくれば良かったのに。」

「しかも、この商品は普通の壁としても使えるんだ！ 耐久性は抜群。→／Pでもビクともしない強度を持っているから、敵が多い日でも安心！」

「実際に使用された方の感想を伺ってみました。」

中国にお住まいの孫さんと劉さん

「部下の勧めで使ってみたのですが、ライバルである曹さんの攻撃を簡単に防ぐことができました。この壁にはとても感謝しています。」

フランスにお住まいのボナパルトさん

「私の辞書にも不可能という文字があるという事を痛感しました。これからは無理な遠征はやめて自国の発展に貢献し、余生は故郷のコルシカ島でゆっくり過ごしたいと思っています。」

「他、沢山の方々からメッセージを頂きました。この場を借りて感謝の言葉を申し上げます。」

「でもマイケル、こんな便利な商品だからきつとお値段も高いんでしょう？」

「ところが！ 今回だけは特別価格でご提供致します！ 当番組が誇る敏腕デザイナーが製作した『越えられない壁Tシャツ』をお付けして、何とたったの39800円！」

「まあ！ プロレタリアートには到底手の届かないお手頃価格ね！ まさに越えられない壁だわ！」

「上手い事言うじゃないかアンナ。それでこそ僕のパートナーだ。さて、この商品の注文は

0120・114・114

フリーダイヤルに『いいいいいい』『いいいいいい』までお電話下さい。」

「皆さんのご注文をお待ちしております。私も売り切れる前に注文しなくちゃ！」

「それでは今日はこの辺で。出演はマイケルと」

「アンナでした。来週もお楽しみに！」

この番組を見ていた赤ずきんはこう質問した。

「ねえねえおばあちゃん、どうして外人さんが出ている通販番組ではこんな喋り方するの？」

「それはね赤ずきんや、お前を食べる為だよ！」

「カルチャーショックだ———！」

文化の壁に直面して先に進めなくなった赤ずきんは、二度と立ち直ることはできなかった。そのうち赤ずきんは、考えるのをやめた。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	中国四千年の歴史～一年目～	6 pt	4 位	1 sp
		四千年！ という大きさと、そこで交わされる遊び会話のギャップが楽しい。ダーツとかアリエナイ設定がユーモラス。 コトバって、じつはこんなふう に人為的に決まっちゃうことも多いよね、と言語論としても興味深く読みました。 歌ってくださった作者さんに拍手!! 特別賞：ドクロちゃん by カベ班（だれか罰ゲームやめて！） イチオシフレーズ：「男×4」		
02	空想科学への旅	6 pt	4 位	1 sp
		出たあ正統派。 夢へのトリガーが空想科学。主張そのものは、そう新奇な部分はなかったけれど、具体的場面が二つ描かれていることで、その主張に説得性がしっかり備わったところがGOOD。 特別賞：旅立ちま賞 by ニトログリセリン班（今後正統派が上位に行くことを願って）		
03	Lover over the wall	6 pt	4 位	2 sp
		ぎっしりの記述を息を詰めてはらはらと読み進んで、ああよかったあ壁を超えなくて、とほっと安心して読み終われます。 「トン」の音がとても印象的なラヴ・ストーリー。小説にかなわぬ思いを閉じ込めて、という古典的な設定がロマンティックでした。 あなたは、どんな結末を期待しましたか？ 特別賞：安心したで賞 by totoRo班(結末が安心しました) / 記憶賞失 by SIMPLE2000 THE壁班（え、ケガしてないんですか。）		
		0 pt	8 位	2 sp

04	ジェノサイド・ウォール	怖いよ～。 何と言っても、このジェノサイド・ウォールなる「神器」の、どこが「神」なんじゃいという悪魔的な設計の凄みがすさまじい。 ただのSFでまとめるのでなく、ラストにひとひねりした工夫も光って、いやほんと悪魔的な子、もとい作者さんでした。来週、（神器から）出てきてくださいますように。 特別賞：かっこいいで賞 by Smooo～～th班（すごくかっこいいから） / 賞 by 女子大班（構造が分かりにくいから星1つ減点で） イチオシフレーズ：「神器ジェノサイドウォール」「Smooo～～～th」「ふひひひひひひ……………（笑）」
05	大きな壁	9 pt3 位2 sp うんとしょ。どっこいしょ。 リズムカルに転がして。がんばったよねえ、かけ声ハーモニー、という仕掛けも楽しく、大きな蕪、現代ヴァージョンでした。 仕掛け（どうやったの？）もヒットして、ブロンズ・メダル&イチオシフレーズ大賞ゲットです。おめでとう!! 特別賞：うんこと賞 by U*ko 班 / うーんと胡椒どっさり賞 by W（ジェノサイドウォール）班（ゴロが面白かった） イチオシフレーズ：「（例の再現不能な1行）」×2 「くおらー」「くおらー(お巡りさん)」
06	カンペキな男	19 pt1 位0 sp 坦々と語って、くすりと笑わせる。さっすがさらさら堂本舗直送。ただ、さらさら堂にしては、やや表現が冗長だったか。詩にはならないにしても、もっと贅肉落とせそう。 さあ、これで3度目の首位。塩を嘗めつつ、より高みを目ざしてくださいませ♪ イチオシフレーズ：「壁について翔太は、私の数段上を行っている筈であった」

07	とある授業での出来事	2 pt 7 位 0 sp がんばれ新米ティーチャー、モンスターペアレントに負けるな！ 応援気分で読めます。 たしかに、ちょっとしたきっかけでブレイクしちゃう教室を仕切ってゆくのも、たいへんそうですね。その、はらはらと凹みがていねいに描写されていました。 特にラスト、謝って回避して良かったのかと自省するくだりが、ほんとに教師の気持ちに添っていて、それすなわち作者さんの誠実さのあらわれでもあるかな、と読みました。
08	文化の壁	12 pt 2 位 2 sp いかにも通販、の軽妙トークにウケました。ただトークって話し言葉なので、この「超えられない壁」という視覚的なフレーズをどう「見せる」かが、むずかしい。テロップとか入れてみる、という仕掛けもアリだったのでは？ いろんなネタもウケたようで、銀メダルでのフィニッシュでしたね。おめでとう!! 特別賞：賞龍拳 by Qwerty班 / 賞龍拳 by (° °)班 イチオシフレーズ：「カルチャーショックだー！」